

二刀流で AI 時代に備えよ

商学部教授 菅原 智

近年、人工知能 (AI) が私たちの社会や生活に及ぼす影響を論じたニュースや記事を目にすることが多い。AI とは、一度作ってしまったら人間の手を離れても自発的に発展していく知能のことをいう。AI の発達には、明るい未来を予想する人もいるが、先日亡くなったホーキング博士などは、AI の思考力が人間の思考力を超えるシンギュラリティ (技術的特異点) が起こると、人類が AI に支配されるとか滅ぼされてしまうと予想している。

AI による人類滅亡の脅威を恐れなくとも、当面の仕事への影響はとても気になる場所である。特に、拙者が大学で教えている会計に関わる仕事に対して AI がどのような影響を及ぼすかについては、関心があるところである。なぜなら、もし近い将来、会計に関わる仕事が AI によって取って代わられるのであれば、会計学者も不要だと言われる可能性もあり、今の職を追われるかもしれないからである。そして近年の AI 研究を見れば、実は会計の未来を少し悲観的に考えてしまうのが本音である。例えば、2015 年に野村総合研究所が発表した研究では、AI によって公認会計士の仕事は 85.9% も代替可能であると報告されていた。税理士では何と 92.5% の仕事が代替可能らしい (野村総合研究所・寺田知太他『誰が日本の労働力を支えるのか?』東洋経済新報社、2017 年)。では全く打つ手なく会計の仕事の消滅を待つしかないのであろうか?あるいは AI 社会に適合した会計の学び方や役割が存在するのであろうか?

このような疑問に対して、椎名市郎 (2017 年) 「複式簿記の原理とその理論的導入法 (12) VII 複式簿記とカウンティング・マインド」が一つの答えを示している。本論文では、高度な技術の導入により多くの会計業務とそこに携わる人間が淘汰されるが、世界水準で活躍する国際会計人のような高度なプロフェッションは存続すると述べられている。鍵はアカウンティング・マインドの修得である。その方法は、英語力や高度専門的能力、多様性を認める人間性の基礎、およびプロフェッションの行動規範を支える社会的期待から醸成される風土、人徳、道徳などの概念、を学ばないといけないと言われている。

これらの知識やスキルが AI 社会を生き抜くのに必要な理由については、これまでの会計に関する歴史が物語っている。友岡賛 (2017 年) 「会計と会計学—会計学の基本問題 II (3) 一」『三田商学研究』第 60 巻第 3 号では、中世イタリアで複式簿記が発達してきた理由の一つとして、不安定でかつ流動的な異種民族国家の下で経済活動を強いられた当時のイタリア市民は、常に書かれた証拠を重視し、それを通じで自分たちの権利を保全しようとする姿勢を身につけてきたことが示されている。すなわち、AI 社会でも生き残れる国際会計

人とは、多文化および多様性の社会においても記録された数値に基づいた論理的説明能力を発揮できる人物であると考えられる。

更に、大内伸哉（2018年）「AI時代における士業の未来—税理士のキャリア戦略—」『税務弘報』では、会計専門家のパラレル・キャリアを推薦する。AIの発達により代替されるリスクは、自分の専門業務が一つだけであるよりも複数の専門業務を持つほうが小さいため、本業と副業といった複数のキャリアを同時に持つという考え方である。資格保有者というのは、その資格を得るために費やした費用や時間が大きければ大きいほど、その資格に固執することで新しいことにチャレンジする障害になる傾向があるという。更に大内（2018年）の研究は、パラレルキャリアを選ぶとき、その専門業務間の距離が遠いほど業務の多様性が高まり、将来における技術革新などの外的環境変化への適応力が高まるといふ。野球界では海を渡った二刀流の選手の活躍が話題になっているが、歌って踊れる会計士やマラソンができる税理士などの異業種間の二刀流は、意外とAI社会に適合する人材になるかもしれない。